

【小松左京氏追悼エッセイ】「小松左京さんの思い出」

新井素子

知の巨人なんて言葉があるけれど、小松さんに対する私の認識は、そんなものではない。あの人は……知の化け物ではないのか。

小松さんとお話をしたことは何回もあるんだけど、一番印象的だったのは、何人かでトウルダルジャンで鴨をご馳走になった時のこと。おい、トウルダルジャンの鴨だぞ、凄いな、こんなの、小松さんがご馳走してくださるんじゃないや、まず食べられないぞ。（というか、複数の人間をトウルダルジャンで奢ってくださいって……別の意味で、小松さん、凄い。）そう思ったのに、私は、「御飯大好き、おいしい御飯は人生の意義だっ！」って思っている人間なのに……なのに、不思議な程、この時の鴨の味は覚えていない。それ以上に、この時の小松さんが凄すぎたのだ。

食事の時の話題は縦横無尽で、でも、科学や文化や哲学や歴史について、小松さんが詳しいことは私も納得、とはいえ、けど。

具体的に何だったのかは覚えていないけれど、当時の若者（って、その時私はまだ二十代でした）のはやり言葉や流行、とてもマイナーな話題まで、全部、小松さん、ご存

じなの！

……何でこの人、こんなことまで知っているんだ？　どんな話題でも必ず小松さんが主導権とって、主導権とれる程そんなことに詳しくて、だから、何でこの人、こんなことまで知っているんだ？

これはもう、教養があるというレベルを超えてる。というか、この小松さんの知識は、すでに『教養』レベルではないっ！　（つーか、いらぬ教養だと思う。そんなもの知っていても何の意味もない雑学を、とにかくやたらと、どこをほじくりかえしても、それでも御存知だったのだ、小松さん。）

ここまで、何でも、知っている。

ここまで、何でも、知らないことがない。

これはもう……一種の、化け物ではないのか。

『知の巨人』じゃなくて、『知の化け物』

☆

同時に、もの凄く「情」がある人でもあったと思うのだ。

私は、星新一さんにみいだしてもらって、作家になった。星新一さんは、私の恩人だ。そして、星さんは、同時に、小松さんの盟友でもあった。

その、星さんが亡くなった時。

星さんを偲んで、『星ヅルの日』というイベントを開催し、私がその実行委員長を勤めたのだけれど……実は、これ、実質的には、ほとんど小松左京プロデューズだったのだ。

勿論、私をはじめ、星さんにみいだしでもらったすべての作家は、星さんを偲びたかった。何かやりたかった。でも、できる実力がなかった。それで、それを許さなかったのが、小松さん。

『星ヅルの日実行委員会』の実務や会合は、小松左京事務所である『イオ』でやらせていただいて、実際に会場を借りるだの何だのは、みんな、イオや『コマ研（小松左京研究会）』の仕切りである。

これはもう、どう感謝していいのか判らない。そして、多分小松さんは、感謝されるつもりもまったくなかっただろうと思うのだ。

ただ、御自分が、盟友である星新一さんを悼みたかっただけ。

どんだけ。

どんだけ私は、小松さんに感謝したらいいんだろう。

どれ程感謝したって、それは、足りないんじゃないかって、私は、思う。

☆

小松左京さん。

ありがとうございます。

そして。

どうか、安らかに、お休みくださいませう。